
けいおん！～その先にある物は～

ラプラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！～その先にある物は～

【Nコード】

N7343X

【作者名】

ラプラス

【あらすじ】

男主。

悲しい過去を背負う少年と軽音部の少女たちの学園ストーリー！
けいおん！の二次創作。

ヒロイン未定、ハーレム！？

学年は唯達と一緒に。

オリジナルストーリーも時々あり。

よろしく！

ゝプロローグゝ（前書き）

まずはプロローグ！

よろしく！

くプロローグく

そこはとある学校。

掲示板のような物の前に人集りがある。

みんな喜んだり泣いたり・・・。

そう。今日は桜ヶ丘高校の受験者合格発表日である。

そんな中、うるさい二人組がいた。

??? 『なあ翔太!!俺受かった!受かったぜえ』

一人は騒ぐ。

翔太 『はあ、少しは静かにしないか?周りからの視線が痛い。』

一人は呆れてため息をつく。

翔太と呼ばれる少年、『長谷川 翔太』。彼こそがこの物語の主人公である。説明は後々。

??? 『お前がおかしいんだよ!受かったんだぜ?桜ヶ丘高校、今年から共学になったんだ。イコール!!先輩は皆女子!新たな出会いがあるかもよ!』

翔太 『勝手に出会ってるよ!俺は帰るぞ?』

??? 『ぬわ〜んだって!?!帰るの早くな?』

翔太 『お前といると何かに感染しそうだからな。』

??? 『俺って何?感染?俺って病原体?』

翔太『違ったのか？』

???『違うに決まってるだろうが！』

翔太『まあいいや。剛、俺はバイトだから早く帰る。』

半泣き状態で、剛と呼ばれる少年『井村 剛』。彼は翔太と幼馴染である。

剛『ああ、バイトか。大変だな．．．。』

剛は何故か悲しげな声になる。

翔太『まあ、仕方ないだろ。生活掛かってるしな。』

剛『そうかい。んじゃ、俺も帰るわ。』

翔太『んじゃな、次会うときはキチンと人型になっとけよ！』

剛『だから俺は人間だあ！』

翔太『あはは、じゃあな。』

そういつて二人は帰路についた。

ゝプロローグゝ（後書き）

どうも、ラプラスです。

けいおん！はじめました！

次回『ゝ登校ゝ』楽しみに！

ゝ登校ゝ（前書き）

今回も短い・・・かも。

それではどうぞ。

～登校～

合格発表からしばらく経ち、桜ヶ丘高校の入学式を迎えた。

剛『入学式～！新たな出会^{アヘ}イッテエー！』

翔太『黙れよ。』

翔太は剛にゲンコツを落とした。

剛『すみませんでした・・・さてと俺は・・・三組だ！』

翔太『・・・俺もだ・・・ヒグッ！』

翔太は思わず涙する。

剛『な、何故に泣く！？』

翔太『悲しいんだよ、お前なんかと同じクラスになるのがな！一年三組よ、乙・・・。』

翔太は言い切る。

剛『まだ始まってもないのに乙！？しかも俺なんかってなんだよ！』

翔太『だから、うるさいんだよ！さっさと教室行くぞ。』

翔太は歩き出す。そして剛は・・・。

剛『ねえねえ、君かわいいね!』

女子1『いやっ!来ないで!!!』

女子2『先生呼びますよ!?!』

初日から犯行に及んだ。

翔太『はあ、離れてて良かった…。』

翔太は一人呟くのだった。

それから二人は教室に向かった。

教室のドアを開くと、視線が集まった。

剛『ぬわっ、なんだこの視線は!眩しすぎて直視できない!』

翔太『眼科にいけ。』

翔太は軽く流す。

そして二人はそれぞれ席につく。

翔太は窓側の席、席についてからずっと空を見上げていた。しかし
..。

???『あのおゝ。。。』

翔太『ん?』

いきなり後ろから声をかけられ振り返る翔太。すると肩までの茶髪で前髪をピンで止めている少女がオドオドしながら翔太を見ていた。

翔太『なに?』

???『わっ．．私、平沢 唯です。よろしくっ!』

そういつて少女は勢いよく片腕を上げた。挙手?

翔太『あ、ああ．．。俺は長谷川 翔太。よろしく。』

翔太は苦笑いしながら自己紹介した。

???『ちょ、唯!』

唯『あ、和ちゃん。』

和と呼ばれる少女がこちらにやってきた。翔太は自分には関係ないだろうと思い、前に向き直す。

担任『はい、それではホームルームを始めます。』

担任の先生が入ってきた。

担任『みなさん、おはようございます。入学おめでとございます。早速ですが、入学式のため講堂に向かいます。』

担任の言葉でクラス一同、廊下に並んだ。

担任『それでは静かに付いてきてくださいね。』

それから入学式を終え、教室に戻ってきた。

そして・・・。

担任『みなさん、一人ずつ自己紹介をしましょう!』

担任の言葉通り、自己紹介が始まるのだった。

く登校く（後書き）

短いな・・・。

なんで自己紹介までやらないかって？

それは・・・剛の苗字度忘れしたからです！

次回『く部活く』お楽しみに！

く部活く（前書き）

部活。

ちなみに俺は軽音部。嘘じゃないよ!?

それではどうぞ。

く部活く

担任の言葉通り、自己紹介が始まった。

出席番号順にやるから、あいつに回るのは案外早かった。

剛『井村 剛！一年間よろしくね！ちなみに．．．彼女募集だよ
！！』

一同『．．．。』

クラスに冷たい風が吹いた。

剛『す、すみませんでした。よろしく。』

泣きそうな剛は静かに席に座る。

周りの女子は剛から少し距離を取る。

翔太『乙．．．。』

それからしばらくして、翔太に回ってきた。

翔太『長谷川 翔太です。一年間よろしく。』

おまけに少し微笑むとクラスには拍手の音が響いた。
自己紹介を終えた翔太は眠りについた。

その日は配布物を配って終わった。

翔太『ふう、帰ろ．．．。』

剛『まってくれよ。』

翔太『バイトだ。』

剛『そつか、そんじゃな!』

翔太『お前は?』

剛『部活見学さ!』

剛の頭上には星がチラホラ。

翔太『んじゃ。』

軽く手を振り剛と別れた翔太。そのままバイト先のファミレスに向かった。

店長『おつ、長谷川君じゃないか!』

翔太『ども!直ぐに準備します。』

翔太は着替えてバイトに専念した。

店長『長谷川君、お疲れさん。上がっていいよ!』

翔太『わかりました!お先失礼します。』

翔太はバイトを終え家に帰る。

翔太『剛は何部にしたんだろうな・・・女子が多い部活とか言って

駆け回ってたりしてな。』

少し口元が緩む。

次の日．．．。

剛『翔太あ！』

翔太『な、なんだよ！部活決まったのか？』

剛『いや、女子が多い部活にしようと思って駆け回ったんだけど．．
．全て拒否られた。』

翔太『．．．。』

翔太は自分の昨日の予想が凶星だったために声が出ない。

剛『どした？』

翔太『いや、想像という物の恐ろしさを知った。』

剛『は？』

それから昼休みになって、二人は屋上に昼飯を食べに行った。

剛『相変わらず、翔太の昼飯は寂しいな。』

翔太『食べればそれでいい。』

剛『はあ．．．。』

翔太の昼飯は片手にコッペパン。片手に牛乳パック。

翔太『それで？剛は何部なんだ？』

剛『俺はバスケ部だ。』

翔太『中学でやってたもんな。』

剛『おうよ！俺が入れば百人力！インターハイ出場決定だな。』

腕を組み、一人頷きながら言う剛。

翔太『ふう〜ん・・・。』

興味が無いため流す翔太。

剛『翔太は？』

翔太『俺にそんな暇あるか？』

剛『そうだな。スマン。』

翔太『別にいいよ。』

それから二人はただひたすら昼飯を食べた後、午後の授業を終えて剛は部活。翔太はバイトをした。

ゝ部活ゝ（後書き）

バイトしたいな。

この時期辛い。

次回『ゝ秘密ゝ』お楽しみに！

く秘密く（前書き）

秘密？なんだろう？

バレちまうぜ！

それではどうぞ。

く秘密く

ピピピピッ．．．ピピピピッ．．．。

翔太『んん．．．朝か。』

翔太の朝は目覚まし時計で始まる。

翔太『おはようさん。』

立てかけてある写真に挨拶。

それは家族写真だ。真ん中に翔太がいて、翔太の右には母。左には父がいる。翔太は幼くして両親を事故で亡くした。それから一人暮らし。バイトに明け暮れる毎日である。バイトを終えて家に着くのは夜中の三時。それから風呂に入り、寝る。起きるのは朝の五時半。ハードな日常を送る。

翔太『ふわあ．．．。』

大欠伸をして着替える翔太。

刃を磨き、顔を洗い、髪を整え、パンを口にして家を出る。

ブブブツ．．．ブブブツ．．．。

いきなり携帯が鳴り出す。

翔太『ん？あははらあんあ？』

パンを口にしているので、『朝からなんだ？』が可笑しい。

携帯を開くと『水石 卓人』と表示されている。翔太は電話に出た。

翔太『なんだ？』

卓人『翔太か？朝早くにごめんな。実は．．．。』

卓人の説明を黙って聞く翔太。

翔太『そっか、わかった。んじゃ来週な。土曜日に行くよ。』

卓人『サンキュー！そんじゃな。』

そして、電話は切れた。

翔太『学校行く前に寄るか。』

翔太は一度家に帰り、立てかけてあるギターケースを持ち再び家を出た。

翔太はとある楽器屋『10GIA』の前に立っていた。そして店にはいる。

店員『いらっしやいませ。』

翔太『あの、このギターなんですが、メンテナンスできますか？』

店員『はい、できますよ。』

翔太『それじゃあ、お願いします。学校終わったら見にきます。』

店員『かしこまりました。お待ちしております。』

そっいつて店を出た。

翔太『ふわあゝ．．．。』

剛『うひょゝ、大きな欠伸だな。』

学校に着いた翔太は席につき大欠伸した。

翔太『まあ、眠いからな。』

剛『何時間寝たんだ？』

翔太『．．．二時間．．．。』

翔太は呟くように言う。

剛『二時間！？信じられないなあおい！』

翔太『忙しいんだ、仕方ないだろ。』

剛『無理はするなよ？身体壊したら、元も子もないんだし。』

翔太『剛も時に真面目腐ったこと言っただな。』

剛『まあな、俺実は真面目だし！』

翔太『zzz．．．。』

剛『寝るなよ！てか、いつ寝た！？』

翔太は寝ていた。それから翔太は放課後まで寝ていたらしい。

翔太『ふわあゝ．．．』

剛『何回目だよ．．．』

剛は呆れる。

翔太『んじゃな。』

帰り道の途中で翔太は切り出す。

剛『ありや？切れたは休みだろ？バイト。』

翔太『寄る所あるから。』

剛『そつか、んじゃな！』

手を振り別れた翔太。そのまま10GIAに向かった。

店員『いらっしやいませ．．．あ、朝の。』

翔太『はい、あの．．．ギターは？』

店員『出来てますよ。』

翔太『そうですか。あの、弾けますか？』

店員『大丈夫ですよ。それじゃ、あちらへ。』

翔太『ありがとうございます。』

翔太はギターを弾くために店員について行く。

店員『こちらです。チューニングは出来ておりますので、そのままどうぞ。アンプもありますし、シールドも。』

翔太『はい、わかりました。』

店員『それでは。終わり次第呼んでください。』

翔太『はい。』

そついうと店員は去って行った。

翔太『さてと。』

翔太はギターをアンプにつなぎ軽く弾き始める。

?????...

しばらく弾いた。

翔太『ふう〜、久々だと感覚鈍るな。』

そんなことを呟くと・・・。

???『長谷川君?』

翔太『ん?』

翔太は声がする方を向く。そこには・・・。

翔太『ひ、平沢!?』

唯『やっぱり長谷川君だ!』

翔太『なんで平沢が?』

驚く翔太に平沢は明るく答える。

唯『私ね、軽音部に入りました!』

翔太『だからか・・・。』

唯『長谷川君こそ、なんでここにいるの?』

翔太『あつ、いやっ・・・その。』

唯『それギターだよね?』

翔太『ああ、そうだけど・・・。』

唯『長谷川君ギター弾けるんだ。』

翔太『まあ、そこそこ・・・趣味だな。』

立ち去りたい度数MAX！
そこへ．．．。

???『唯、知り合いか？』

唯『あ、りっちゃん！！そうなのだよ、同じクラスの長谷川君だよ！』

???『唯の知り合いなら私の知り合いだ。よろしく成瀬川！』

翔太『いや、長谷川です。』

翔太は呆れる。めんどくさい奴キター。

???『私は田井中 律。よろしくな！』

翔太『よろしく．．．。』

律『なんだ？浮かない顔してんなあゝ。』

翔太『だれのせいだよ！だれの！』

律『すまなかつたって．．．。』

翔太『はあ．．．。』

???『律っ、また人に迷惑かけてるのか？』

律『違う違う！零は勘違いしすぎだ！』

漣と呼ばれた少女が近づいてきた。

翔太『まったく・・・何人で来てんだよ・・・』

唯『四人だよ!』

翔太『まだいるんかい!!』

ギターをしまいながらツツコム翔太。

漣『私は秋山 漣。よろしくな。』

翔太『長谷川 翔太だ。よろしく。』

そして軽く微笑む。

漣『う、うんっ／＼／＼』

律『あれえ？漣ちゅわん？照れてるんでちゅか?』

漣『ち、違う!』

????『あらあらあゝ。』

翔太『うわっ、誰?ていうかいつの間に!?!』

????『今です。』

ユルふわお嬢様系。

律『ムギは神出鬼没なんだよ。』

翔太『ムギ．．．名前？』

???『私は琴吹 紬です。』

翔太『ああ、紬だからムギか．．．。』

紬『はい。』

翔太『よろしくな、俺は長谷川 翔太。』

紬『はい、よろしくお願いします。』

翔太『それにしても、なんでみんなここに？』

唯『あれ？なんでだっけ？』

漣『唯のギターだ！』

唯『おお、そうであつた。』

翔太『なんだ、平沢ギターなのか？』

唯『うん、でもどれがいいかわからなくて．．．。』

少し俯く平沢。

翔太『初心者？』

唯『うん。』

翔太『なら、4・5万くらいのにすれば?』

唯『あ、それ湊ちゃんにもいわれたよ!』

嬉しそうに言う平沢。

翔太『まあ、最初なん「あ、これがいい」だから・・・って、聞けよ。』

呆れる翔太。平沢は一つのレスポールの前にしゃがみこみ見つめている。

湊『でもそれ、25万するぞ?』

唯『はわわあ、流石にこれは手がでないや』

少し残念そうにする平沢。でも、やっぱりそれが欲しいのか目が離れない。

律『唯・・・。』

紬『唯ちゃん・・・。』

しばし沈黙。

翔太『はあ、おい平沢!』

唯『は、はい!』

翔太『．．．欲しいのか？』

唯『．．．うん．．．。』

翔太『待つてろ。』

唯『へ？』

翔太はレジの方に歩いた。

く翔太sideく

俺はレジにいる。

『あの、すみません！』

店員『はい、なんでしょう。』

『あそこのギブソンのレスポール、少し安く出来ませんか？なるべく限界まで．．．。』

店員『少々お待ちください。』

そういつて店員は奥に歩いて行く。
しばらくして再びやって来た店員。

店員『お待たせいたしました。店長に聞いたところ．．．15万までならなんとか．．．。』

『そうですね．．．わかりました。買いますレスポール。』

店員『本当ですか？ありがとうございます！』

『それと、ギターのメンテナンスセット一式つけてください。』

店員『かしこまりました。』

『全部できたら、あの子に渡してください。俺は帰りますので。』

店員『わかりました。それでは。』

会計を済まして俺は店を出た。

（翔太 side out）

律『遅いなあ、何やってんだ？』

唯『わからない．．．。』

紬『あれ？帰っちゃいましたよ？』

漣『どうしたんだ？』

しばらくして少女達のもとに店員がやって来た。そして唯の目の前のレスポールをギターケースにしまう。

唯『あつ！』

唯は買い取られたのだと思い残念な顔をする。しかし．．．。

店員『お待ちいたしました。ギブソンレスポール、スタンダードです。』

そういつて店員は唯にレスポールの入ったギターケースとビニール袋を渡す。

唯『え?』

唯は何が起きたのかわからず呆然としている。

澪『どういことですか?』

不思議に思った澪が店員に聞いた。

店員『先程、ある学生さんが買われました。自分は帰るから、貴女に渡してくれと・・・。』

律『か、買ったって・・・25万をか?』

店員『いえ、15万円に値切られました。それとメンテナンスセット一式と・・・。』

一同『・・・。』

少女達は声が出ない。

唯『長谷川君・・・。』

律『それにしても、よくそんな大金持ってたよな・・・。』

澪『詳しく聞きたいな。』

紬『そうですね．．．。』

店員『あ、貴女は社長の娘さん!』

紬『こんにちは。』

紬は可憐に挨拶する。

店員『もしかして先程の学生さん、紬お嬢様の友人ですか!?!』

紬『はい、そうですよ!』

店員『て、店長!』

店長『な、なんだね?』

店員『先程の学生さん、紬お嬢様のご友人だそうです!』

店長『なんだって!?!では私達は紬お嬢様のご友人に15万も払わせたのか?』

店員『はい．．．。』

店長『なんて事だ!君、次に彼を見たら全金お返し下さい。』

店員『わかりました!』

唯『ムギちゃん?』

紬『実はここ、私の家の会社の系列なの。』

律『ムギは一体・・・。』

漣『唯、長谷川君って唯とクラスおなじなんだろう?』

唯『うん、そうだよ!』

漣『ちゃんとお礼言っただぞ?』

唯『わかったであります!』

律『やる気あんのか?おい。』

紬『それよりも・・・長谷川君って、なんで軽音部入らないのかしら・・・。』

律『いつか勧誘だ!』

唯『おー!-!』

律『お前はまずお礼だ!』

《ベシッ》と鈍い音が響く。唯は涙目でデコを抑える。

唯『うう・・・痛いよりっちゃん!』

く秘密く（後書き）

はいはい、秘密って翔太がギター弾ける事だったんだ！

期待して損しました。

こんな感じで次回『く平沢家く』もお楽しみに！

く平沢家く（前書き）

いやあ、テスト前に更新は危ないか・・・でも俺は屈しない！

それではどうぞ。

く平沢家く

唯のギターを買った翌日、翔太は学校帰りにスーパーに来ていた。

翔太『今日は何にしようか．．．』

バイトが休みなため、自分で夕食を作る事にした翔太。

翔太『肉．．にしよう。』

呟きながら肉コーナーに足を運ぶ翔太。しかし．．。

???『よいしょっ．．うう．．。』

一人の少女が肉を取ろうと必死に背伸びをしていた。翔太は少女の目当ての肉を取って渡す。

翔太『これか?』

???『あつ、はい!ありがとうございます。』

翔太『いえいえ．．って平沢!?』

???『ひゃいつ!』

翔太は少女と目を合わせた途端、顔が唯にそっくりなので声を上げた。

翔太『髪型変えたのか?いつも前髪をピンで止めてるだけなのに．．

。』

???『え？あ、あのぉ．．．。』

少女はオドオドしている。

翔太『人違い？すまない。てっきり同じクラスの奴と間違えたよ。』

???『あの、それって平沢 唯ですか？』

翔太『知ってるのか？』

???『はい、唯は姉です。私は妹の憂です。よろしく願いします！』

翔太『ああ、俺は長谷川 翔太。よろしくな。』

翔太は内心、姉妹の違いに驚いている。

憂『あ、あなたが．．．。』

翔太『ん？俺の事知ってるのか？』

憂『はい、お姉ちゃんのギター．．．。』

憂は申し訳なさそうに俯きながら言う。

翔太『ああ、あれか。気にするなよ、俺がしたくてしたんだから。』

憂『でも．．．』

一歩も引かない憂に、翔太はため息をつきながら頭を撫でる。

憂『へ？』

翔太『まったく、気にするなって言っただろ。大丈夫だ。』

優しく微笑みながら言う翔太。

憂『．．．はいっ／＼／＼／＼』

少し頬を赤くして憂は頷いた。

翔太『んじゃな。』

翔太は手を振り帰ろうとする。

憂『あ、あの！家で夕食食べませんか？』

翔太『え？いや、いいよ別に．．．。両親にも悪いし。』

翔太がそう言うと憂は暗い表情に変わる。

憂『両親はよく二人で旅行してて、今日もいなくて．．．お姉ちゃん二人なんです。』

憂は俯く。

翔太『そうか．．．わかったよ。ご馳走になろうかな？』

憂『本当ですか!?!』

翔太『おわっ!!あ、ああ。本当だから離れような。』

いきなり飛びかかって来た憂に苦笑いしながら言う翔太。

憂『あっ!す、すみません///』

慌てて離れる憂。

翔太『とにかく、買い物済まそうか。』

憂『はい!』

それからしばらくして買い物物を済ました後、憂に連れられて平沢家にやってきた。

翔太『ここが。。。』

憂『はい!私達の家です。』

翔太『いきなり押しかけてよかったのかな?』

憂『お姉ちゃんと二人なんで大丈夫ですよ。』

翔太『そういうもんか?』

憂『そういうものです!』

憂は物凄く笑顔だ。翔太は笑顔に弱い。

憂『それじゃ、入りましょうか。ただいまお姉ちゃん!』

憂は勢いよく玄関のドアを開ける。

翔太『お邪魔します．．．。』

翔太は恐る恐る平沢家に入った。すると．．。

唯『うゝいゝ!!お帰りいゝ!!!』

唯が憂に抱きついた。

翔太『．．．平沢．．．。』

唯『ふえ?．．．おおゝ長谷川君!』

憂『翔太さん今日私達と夕食食べてくれるんだよ、お姉ちゃん!』

唯『え?本当!?!』

憂はさらに笑顔。

唯も嬉しそうだ。

翔太『．．．ご馳走になります。』

翔太は苦笑い。

平沢家の姉妹揃っての明るさに驚くのだった。

ゝ平沢家ゝ（後書き）

勉強？何それ、食えるの？

テスト危うしラプラスです。

次回『ゝ家族ゝ』お楽しみに！

ゝ家族ゝ（前書き）

平沢家！！平沢家！！

俺なに言ってんだ？

まあ、いいか。

それではどうぞ。

ゝ家族ゝ

平沢家にあがった翔太。憂はすぐにキッチンへ。唯は翔太と向かい側に座り笑顔である。

唯『えへへ。長谷川君だ。』

翔太『そんなに嬉しいか・・・？』

翔太は苦笑いしながら言う。

唯『嬉しいよ！！いつも憂と二人だけだから寂しいもん・・・。』

翔太『両親・・・よく旅行行くんだろ？』

唯『うん、だから寂しいんだ。・・・長谷川君は両親どんな人なの？』

翔太『へっ！？』

翔太はすこし戸惑う。

唯『ん？』

翔太『その・・・俺一人暮らしなんだよ。』

唯『えっ！？』

唯は翔太の言葉に驚く。

翔太『少し事情があつてね．．．。』

唯『そうなんだ．．．。』

しばし沈黙。

憂『お姉ちゃん、翔太さん。ご飯できましたよ!』

唯『ういゝ、ありがとう!!うわあ、ハンバーグだ!!』

翔太『ありがとう。』

そして翔太と平沢姉妹は夕食を食べる。

翔太は唯が姉だという事に少々疑問をいただいていた。笑

唯『ふいゝ食つたあ!!』

翔太『親父かよ!?!』

憂『ふふつ。』

それからしばらく平沢姉妹とはなしていた。

翔太『んじゃ、そろそろ帰るよ。』

憂『あ、今日はありがとうございました。』

翔太『いや、こちらこそ。美味しいハンバーグありがとう。』

憂『いえいえ／＼／＼』

唯『またいつでも遊びに来ていいよ!』

唯は嬉しそうに言う。

翔太『いや、俺も男だ。抵抗がある．．．』

翔太は苦笑いしながら言う。

唯『ちえゝ、連れないなあ長谷川君。』

憂『まあまあ、お姉ちゃん．．．』

そんな会話をした後、翔太は平沢家をでた。

翔太『ふわあゝ、ヤバイ。バイト．．．』

それから翔太はバイトに遅刻してこっぴどく叱られたとき。

ゝ家族ゝ（後書き）

俺も早くバイトしたい！

次回『ゝ久しぶりゝ』お楽しみに！

く久しぶりく（前書き）

目覚ましドッキリ・・・失敗！？

テストヤバかったです。

それではどうぞ。

く久しぶり

ピピピピっ・・・ピピピピっ・・・

翔太『・・・』

翔太は起きない。

ピピピピっ・・・ピピピピっ

翔太『・・・』

まだ起きない。

すると《ピンポーン》

???『翔太あ、久しぶり!』

誰かがインターホンを鳴らした。

翔太『・・・』

翔太はやはり起きない。

???『いないのか?』

インターホンを鳴らした人は首を傾げている。

???『ん?陽介じゃん。』

陽介『あれ？剛？』

あの剛がやってきた。

剛『何してんの？』

陽介『いや、翔太に用事があるんだけど……。』

剛『ああ、多分寝てるぞ翔太。』

陽介『何故にこんな時間まで？』

剛『バイト。』

剛が苦笑いしながら言う。

陽介『ああ、相変わらず忙しいな。』

陽介が納得したかのように手を合わせる。

剛『でも大丈夫！見よ、我がマスターキーを！！』

剛がドラ○もんみたいに鍵を出す。

陽介『いつの間に！？』

剛『ふふふつ、この前翔太に漫画を貸したら三年間返してくれなかったんだ。だから侵入するために……。なっ！！』

陽介『いや、なっ！！じゃないだろ。』

剛『まったく、相変わらずだな陽介は。細かい事は気にするなよ。それより、翔太だろ?』

陽介『そうだったな、起そうか。』

剛『我がマスターキーよ!この扉を開けたまえ!』

陽介『やめろよ、恥ずかしいだろ!』

周りからの視線が痛い二人。そして剛は容赦無く鍵を開けて翔太の家に入って行く。

陽介『はあ、どうなっても知らないよ?』

陽介は不安ばかりを抱いていた。

剛『こちら剛。長谷川 翔太の自宅に潜入しました!!これから目覚ましドッキリをしたいと...。』

剛の口が止まる。そして苦笑い。

翔太『剛...。』

剛『よつ、翔太...。』

翔太『鍵は閉めてたよな?』

剛『いや開い「閉めてたよな?」...はい。』

翔太『さっきの会話は聞いてた。なんでも、前に俺が借りた漫画を取るために？マスターキーまで作って？入ったらいいじゃんか。』

剛『はい、そうです。』

翔太『．．．不法侵入．．．。』

剛『．．．Yes。』

翔太『消えろ．．．。』

そして．．．。

《ブギヤ〜》

と、人の叫び声が響いて来た。

陽介『はあ、自業自得。』

陽介は呆れるしかなかった。

それから数分が経ち．．．。

翔太『んで？陽介は分かるが、なんでコレも来るんだ？』

翔太が指差したのは．．．

剛『え？俺？俺はなあ．．．って、コレとはなんだ？俺は人だ！！』

翔太『え？そうだったのか？』

剛『もういいです。』

剛は泣きそうな顔でため息をついた。

陽介『それにしても久しぶりだね、二人とも。』

翔太『まあ、二年ぶりだけだな。』

陽介『あはは、それもそうだね。』

剛『あ、そういえば翔太。これ、借りてたゲーム。』

剛はゲームを差し出すが・・・。

翔太『それで、いつ集まるんだ？』

陽介『ああ、来週の日曜日。俺はテスト明けたね。』

翔太『そうかテスト・・・か？』

陽介『翔太？』

陽介は様子がおかしい翔太に声をかける。

翔太『まあ、大丈夫だな。中学のときみたいな調子で。』

陽介『まあ、翔太なら大丈夫かな。』

二人で楽しく会話をしていると・・・。

剛『俺の話を聞けー！！』

剛はたまらず声をあげる。

翔太『あれ？剛いたのか？』

陽介『全然きづかなかったよ。』

剛『ひどいな。それに、陽介はさっき会っただろ？』

陽介『そうだった？』

剛『はあ．．．。』

剛はため息を漏らした。

それからしばらく三人で話していた。

剛『んじゃ、そろそろ帰るか。』

陽介『そうだね、じゃあ翔太。また日曜日！！』

翔太『ああ、またな。みんなによろしく。』

そして、剛と陽介は手を振って帰っていった。

翔太『バイトか、テストも．．．無理だな。』

翔太は一人でつぶやくのだった。

く久しぶりく（後書き）

いよいよ翔太がテスト!!

結果はどうなる!?

次回『くテストく』お楽しみに!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7343x/>

けいおん！～その先にある物は～

2011年11月1日09時35分発行